

抄 録 集

セッション I 司会 可児久典 (聖隷三方原病院)

1. 非定型カルチノイドの1切除例

県西部浜松医療センター 胸部外科 半澤 雋, 舛木 茂, 佐々木一義
瀬戸口智彦

症例は女性, 48歳. 職場検診による胸部異常影を主訴に入院. 胸部X線写真上, 右S⁵に径30mmの腫瘍陰影と前縦隔に胸腺腫を思わせる腫瘤影あり. 右中葉切除, 縦隔腫瘍摘出術を施行, 組織学的に非定型カルチノイド, 気管支性嚢胞との診断を得た. 肺病変の形態学的検索により, 神経内分泌機能が証明されたが, 定型カルチノイド (Typical Carcinoid) と大細胞神経内分泌癌 (Large Cell Neuroendocrine Carcinoma) との鑑別に苦慮した. 肺癌の組織分類 (日本肺癌学会) における神経内分泌癌の位置付けについて若干の考察を加える.

2. 血胸を併発した胸膜孤立性線維性腫瘍の1切除例

浜松医科大学 第1外科 朝井克之, 鈴木一也, 霜多 広
高橋 毅, 伊藤 靖, 数井暉久

症例は31歳男性. 主訴は呼吸困難. 近医で左肺腫瘍, 左血胸と診断され当院入院. 1,300mlの血性胸水をドレナージした. CT, MRIで左胸腔頂を占拠する8cm大の球形腫瘍を認めた. 手術は胸骨正中切開と第1肋間開胸でアプローチした. 病変は前方の第1肋骨および肋間部に固定された胸膜外の腫瘍で, 左鎖骨の上下で左鎖骨下動脈等の重要血管を確保後に腫瘍を切除した. 病理組織学的に胸膜孤立性線維性腫瘍と診断された.

3. 化学療法と放射線 70Gy 照射後に切除した縦隔浸潤肺癌の1例

静岡県立総合病院 呼吸器外科 大石 久, 稲葉浩久, 吉田浩幸
太田伸一郎

症例は40歳男性. 検診で胸部異常陰影を指摘され当院受診. 画像上, 左S¹⁺²に4×6×7.5cmの腫瘤影を認め, 血清CEA値は16ng/ml. 経気管支肺生検にて確定診断は得られなかったが, 肺腺癌を強く疑った. cT4N2M0, Stage III bと判断し, CDDP・VSDの化学療法2クールと放射線照射70Gyを同時併用し, 腫瘤影は1.8×4×5cmと縮小, CEA値も3.2ng/mlと低下. 胸骨正中切開+前方切開にて左肺上葉切除+縦隔胸膜合併切除+R_{3αβ}を施行. 術後経過は順調.

4. 肺小細胞癌術後5年以上生存の2例

国立療養所富士病院 呼吸器外科 榑原賢士, 緒方孝治, 平野竜史, 西海 昇
堤 正夫, 石原重樹, 並河尚二

当院で1995年1月から2001年5月まで原発性肺癌手術例は251例で肺小細胞癌切除例は, 8例であった. そのうち6例が生存中で2例が術後5年以上再発を認めていない. その2例を提示する.

症例1: 62歳, 女性. 左S³原発 small cell ca. (intermediate type) と診断. 術前化学療法 CDDP + VP16 後,